



TITLE:

聖書の天文学(第四章)

AUTHOR(S):

モーンダー, E. W.

CITATION:

モーンダー, E. W.. 聖書の天文学(第四章). 天界 1924, 4(41): 187-191

ISSUE DATE:

1924-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160072>

RIGHT:

聖書の天文学

E・W・モーンダー

第四章 穹蒼

希伯來語「レキヤ」の二重の適用——その言語學的意義——堅固の觀念は「七十人」によつて誘導さる——希伯來人の觀念にあらず——天の「基礎」——「天蓋」——天の「諸階」——雲と雨——大氣の循環——希伯來人の鑑識は自然に於ける恐怖すべきものに迄及び——雲の「平均」——「擴がり」——「天の窓」——字義的水門にあらず——四方の風——四方——地球の圓——地下水——淵

創世記第一章第六節は主要な言葉即ち穹蒼を譯された言葉の正確な意義に關して一つの困難を示して居る。

『而して神言ひたまひけるは、水の中に一つの *raqia* (穹蒼) ありて、水と水を分つべし。而して神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまへり、即ち斯くなりぬ。而して穹蒼を *Shamayim* (天) と名けたまふ。而して其の夕と朝とは第二日なりき。』

前掲の句に於ける *raqia* なる言に由つて、言及されたのは大氣である事は勿論完全に明白である。然し同章の後部に於いて其の語は、異つた關係に使用されて居る。『神言ひ給ひけるは天の穹蒼に光あれ。』(創世記一の十四)

我等が地球から上方を眺める時には、我等は二重の媒介物

を通して眺める。地球の近くには我等の大氣(雰圍氣)があるその上には我等の知る所ではエーテル以外何物も存在しない星の間の空間がある。我等は我等の大氣が終つて其の外界の虚空が始まる所の境界線を看出すことは出来ない。それ故に兩者は同じく「穹蒼」と記されてゐる。而も兩者の間には相違が存在する。その中低きものは雲を支持し、高きもの、中には二つの巨なる光(地球から見ても)と星とが置かれてある。それ故にその高層のものは特に「高き所」の「天の穹蒼」(*raqia hashmayim*) (創一の十四) である。それは「下」即ち空の鳥が飛びかふ高い擴がりの「表面」に「即ち」上に「又は」その注目の下に「ある」。

されば、穹蒼は「テニス」が「中央の蒼天」と歌つたもので、我等の欲するに應じて、我等の頭上どれ程の高さに至る迄も考へる事が出来る。雲は一つの意味に於いてはその上にある而も他の意味に於いては、太陽、月及び星等明かに雲よりも遙か高層にあるものもその中に置かれてある。

それ故に「穹蒼」なる言葉によつて言及された事柄については何等疑問が存しない。然し、此の言葉の言語學的意義に關して疑問が存在する、而してそれと關聯して、希伯來人自ら天の圓天井を如何に思考したかに付いて疑問が存在する。

「穹蒼」と譯された *raqia* なる言葉は元來「一つの展開」又は何物が擴けられたもの又は打ち展ばされたもの、「ひろがり」

を意味する。此の名詞が由來した動詞は聖書に於いて、諸天や他の關係に言及せるものとして共に屢々使用されて居る。斯様にヨブ記三十八章十八節には、次の疑問が質されて居る、「汝彼ミミもに鑄たる鏡の如く堅き蒼穹を張ることを能くせんや?」〔祭司エレアザルはコラ、ダタン及びアビラムの謀反の後に其の謀叛人等の銅の香爐をこり、それを「祭壇を包むために用ゐる潤き展板を作りたり。〕イザヤが記した偶像を作る金工は「金をもて之れをおほふ」(イザヤ書四十の十九)それと同時にエレミヤはタルシシより携へ來し箔に延べた銀(銀箔)(エレミヤ記十の十九)ミ云つて居る。又詩篇百三十六篇の創造の記事中に我等は同じ語葉が地球に關して用ひられて居るのを見る「地を水の上に布き給へる彼に感謝せよ」〔六節〕(地の意味については後の部參照)此れ及び多くの他の章句に於いてひろがりの觀念は明かに此言葉が傳へる様に企てられたものである。然るにかの七十人は舊約聖書のギリシヤ語譯文を作るに當つて、自然ギリシヤ天文學の中心地であつたアレキサンドリアに於いて當時信ぜられた天文學の觀念に影響せられたのであつた。此地並に當時に於いては多くの水晶球の教義——ユウドクサス及び他の學者の數學的研究の一誤解——が流布して居た。是等の球は完全に透明にして日には見えない堅固な殻の一連續で、その中に太陽と月と諸遊星とが種々に置かれて居るを考へられた。かの七十人はこれを

Secundum 即ち穹蒼を以つて翻譯し、かくして堅固な構造の觀念を傳へる事に於いて、彼等は現代的科學の最新の語葉を云へるものミ勿論考へたのであつた。

若し聖書中に希伯來人が誤謬の科學的概念を所有したミ云ふ何等かの證據があれば、彼等にそれを歸するに逡巡してはならない。我等は聖書の各記者達が正確な専門的科學記事を記す様に超自然的の靈感を受けなかつたミ云ふ事を如何に明かに認識するにも足りない。而して彼等がかく靈感を受けたミ想像すれば、記憶すべき事は、今日の我等自らの科學ですら萬事に於いて終局に達して居ないミ云ふ其の充分な理由の爲めに、之等聖書記事を應々その正確に比例して誤謬を考へるものなる事之れである。

若し聖書中に希伯來人が誤れる科學的觀念を有したミ云ふ何かの證據があれば、彼等にその誤謬を歸するに躊躇してはならない。此の場合に於いて、何等かゝる證據はない、實際其處には反對の有力なる證據が存在する。

希伯來語 *shamayim* なる言葉は既述の如く、實際「展開」を意味する事恰も *chanayim* が「高き處」を意味するが如くである。それ故に、是等二箇の言葉中に各々表面ミ高所ミの意味が存在し其處に「三次 three dimensions」——換言せば空間の認識がある。

我等が地表上の空間に言及しようと思ふ時に、それを表はすべき二つの云ひ表し方を近世の英語に於いて有してゐる。

我等は「The vault of heaven」又は「The Canopy of heaven」云ふ事が出来る。前者は大抵使用されて居る。それは實際有名な天文學者に由つてある科學的著述の表題として採用された。然し圓天井(Caul)なる語は確かに堅固な構造の暗示を與へる一方天蓋(Canopy)なる語はより軽い多分或る織物の如き觀念を呼び起さしめる。

希伯來人が「穹蒼」を堅固な構造を考へなかつたを思考する事の理由は第一、其の言葉が必ずしもその意味を有しない事次に希伯來人の自然に對する心的態度は此の觀念を必要とする様なものでなかつたを云ふ事之れである。「穹蒼」上の水を何が支持してゐるか?」この疑問は彼等を煩はさなかつた希伯來人への書翰の記者に於ける如く、彼等にまつては、神が「彼の權能の言をもて萬の物を保ち給ふ」(ヘブル書一の三)を考へるのみで充分であつたのであつて、彼等は其機關に關しては思ひ悩まなかつたのであつた。然し此の外聖書中には明かに水を運ぶものとして雲のこを述べてある多くの章句があり、その中或るものは最も古い書卷中に出て居る。それ故に水を「穹蒼の上」又は「天の上」に置く表現法は「雲の中」を意味するより外にない。實際後に見るが如く、全く明瞭な記事が大氣の循環についてなされて居り、近世の詩人によつても殆ど改め得ない程のものである。

ダビデが「天の基動き搖へり、そは彼怒り給へばなり」(サ

ムエル後書二の八)の歌ひ、ヨブが「彼叱咤し給へば天の柱震ひ且つ怖る」(ヨブ記二六の一)を云つたのは事實である。然し基及び柱に對する言及が明かに單に詩的比喩として企てられたのみならず、又彼等は更に度々地球についても用ゐられて居る、而も同時にヨブは明かに神が「北(の天)を虚空に張り、地を物なき所に懸けたまふ」(ヨブ記二六の七)を指摘してゐる。ヘブル人はヒンドウー人種が、地球は幾つかの象によつて支へられ、其の象は龜に、龜は蛇に銘々支へられて居るを考へた様な思想は懷かなかつた。

聖書に於いて大抵の場合「地球」(earth)なる語は此の我が遊星の堅固な塊を意味せずして、唯その表面を云ふのである、「海」に對して「乾ける土地」、人々動物の住居地である地方を意味する。此の意味に於ける地球の「柱」又は「基」は岩石の大なる組織であつて、是等は何等中間の構造の要なくして、神の權能によつて直接に支持されてゐるものと考へられて居つた。ヘブル人は明瞭に全體を安固に保つものは神の意思のみであるを認識した。

次の如くハンナは歌つた

『地の柱はエホバの所屬なり』

エホバ其の上に世界を置きたまへり。(サムエル前書二の八)而してアサフはエホバが次の如く云ひ給ふ者記述してゐる

『地をすべての之れに住むものとは解けたり。』

我はそのもろくの柱を立てたりしなり。〔詩篇七五の三〕

而も尙、我等が「天蓋」云ふに等しく、詩篇百四篇二節にはエホバが「天を幕の如くに張る」者として記され、而してイザヤは尙も充分な形に於いて此觀念を與へて居る。「おほそらを薄絹のごとく布き、これを住まふべき幕屋の如くはり給ふ」〔イザヤ書四〇の二三〕「天（おほざら）をのべる」云ふ同じ言ひ表しはイザヤ書に於いて繰返して使用されて居る。實際それは彼の特殊の語法の一つである。此處では疑ひもなく、「伸張」「擴がり」が意味せられた觀念で堅固の觀念ではない。

預言者アモスは尙他の一つの相似語を使つて居る。「彼は樓階を天に作り給ふ」〔アモス九の六〕。イザヤが全星辰宇宙をエホバの幕又は大天幕として言及せるに、アモスは天の高所を彼の御座に達する階段に譬へて居る。「樓階」は「階段」であつて、モーゼが「アクラビムの階段」〔日本譯には「阪」民數記略三四の四〕云ひし如くであり、又ダビデはオリフ山の階段〔日本譯には「路」サムエル後書二五の三〇〕を作つた。ヘブル人は天を字義的に階段及び貯水所とは見做すことは出来なかつた。

穹蒼即ち雰圍氣は穹蒼の下にある水即ち太洋、海、河川等と、穹蒼の上の水即ち雰圍氣によつて運ばれ雲の中に見られ凝結して雨となる水蒸氣の集團を分つものとして述べられてゐる。我等は之れを全く同じ「上なる水」の表現が讚美の詩篇〔百四十八篇四節〕中にあるのを發見する――

『もろくの天の天よ』

天の上なる水よ、エホバをほめたゝへよ』

而して再び「二人の子等の歌」の中に――

『天の上なる凡ての水よ、エホバをほぎまつれ』

聖書の後期の諸卷に於いては大氣を通じて水の循環する問題が更に充分に言及されて居る。預言者アモスは二回も、エホバを「海の水を呼びて、地の面にこれを注ぐ者」〔アモス書五の八、九の六〕として記して居る。之れは單に潮の満干に對する言及ではない。何となれば傳道者は傳道之書（一の七）に明白に「河はみな海に流れ入る、而も海は盈つることを無し、河はその出できたれる處に復還へり行くなり」と指摘し、而してイザヤ（イザヤ書五五の十）も同じ思想のあるものを適用せる様に見える――

『そは天より雨くだり雪おちて復かへらず、地をうるほして物をええしめ、萌を出さしめて、播し者に種をあたへ、食ふ者に糧をあたふ如く。』

スキアバレリはイザヤ書の此の節は、かくの如く降る水は種子と果實とに變化されることを考へられたことの根據の上に「明かに水の大氣的循環の觀念を除外する」〔舊約聖書の天文学三三頁註〕ものである。實際論じて居る。然し確かに此觀念は美麗であると共に眞理である。雨は植物によつて吸收され、而して種子と果實に變化され、而して雨の同じ分子が再び蒸

發され、雲の中に新しく上昇せしめられるミ云ふのは困難なるであらう。更に、若しも我等が該引用句を完全にするならば、述べられてゐるのは、雨がその目的、達成する迄は還らないミ云ふ事であるのを發見する。

『かくわが口より出づる言もむなしくは我にかへらず、わが喜ぶミころを成し、わが命じ遣りし事をはたさん』（イザヤ書五五の一）

エリフは蒸發の過程を正確に記述して居る――

『見よ、神は大なる者に在して、我等かれを知り奉らず、

その御年の數も計り知るべからず。

そは彼れ水を細にして引きあげ給へば、

霧の中より滴たり出で、雨ミなるに、

雲これを降らせて、

人々の上に沛然に灌ぐなり』（ヨブ記三六の二六―二八）

聖書の全書卷を通じて、雲ミ雨ミの間の關係は明瞭に心に留められてゐる。デボラは彼の女の歌（士師記五の四）に『雲水を滴らせたり』ミ云つて居る。詩篇中には多くの引用句がある。七十七篇十七節に『雲は水を注ぎ出せり』ミあり、百四十七篇八節には『エホバは雲をもて天をおほひ、地のために雨をそなへ給ふ』ミある。箴言十六章十五節に『其恩寵は春雨のごとし』ミある。傳道者は云ふ『雨の後に雲返る』（傳道之書十二の二）ミ、而してイザヤは『また雲に命せてその上に雨ふるこ

こなからしめん』（イザヤ書五の六）ミ云ひ、ユダは『風に逢はるる水なき雲』（ユダ書十二）ミ云つて居る。（以下次號）

* * * * *

* * * * *

註一「天の構造」について舊約全書の記者等がバビロンの影響を受けたリミの説「宇宙建築ミ其居住者」中「古代人の宇宙」の中にあり、本文の研究ミを對比せよ。

註二「天の上の水」に關し、山本氏の説明（右の書三六頁）ミ本研究ミを比較せよ。

――

滿一星々が一千年間に唯一夜しか見えない様なこゝがあつたら、人類は昔から示めされて來た神の都の記憶をいかに信じ且つ憧憬し、且つ代々保存した事であらう？

――ラルフ ワルドー エマスン

* * * * *